

文化芸術

舞台
安住 莉子の
チト

人形劇団むすび座は、折々にめざましい作品をつくってきた。今回の創立五十周年記念公演「チト〜みどりのゆびをもつ少年」(M・ドリュオン作、篠原久美子脚色、福永朝子

心優しい世界が広がる「チト」
(服部義安撮影)



人形劇団むすび座 「チト〜みどりのゆびをもつ少年」

演出)もその一つ。音楽や映像、美術など工夫に満ちた演出の数々で、心優しい世界を豊かに繰り広げた。どこにでも花を咲かせることのできる、不思議な少年の物語。武器生産工場を経営する大金持ちの家に生まれたチトは、学校での勉強が苦手だ。父親はそんな彼に現実を学ばせようと、二人の家庭教師を付ける。

庭師のヒゲさんは植物の育て方を教え、チトの指の力を発見する。もう一人のカミナリさんは、刑務所や貧民街を見せ、規律の大切さを説く。心を痛めたチトは、それらの場所に花を咲かせ、彼らに活力を与える。やがて遠い国で戦争が始まることになり、工場は活気づく。ヒゲさんらに戦争の悲惨さを聞いたチトは、ひ

心の優しさ豊かに感動的に

そかに武器に花を仕込む。いかにも心優しい物語。一種の教訓話に終わる危険もある。だがこの舞台は、演出の数々で楽しさを満喫させながら、物語の心を伝えるのだ。まずは、普通の人形だけでなく、人間と一体になったり絵看板風のものなど、人形の多様で自在な造形が愉快だ。そして斬新な映像と美術が硬質な魅力の工場のシーンや、チトがあちらこちらに花を咲かせる瞬間の魔法のような驚きなど、心躍らせる表現に満ちている。さらにバンドの歌と生演奏で、ミュージカルの楽しさも加わる。繰り返し歌うのは、大地や太陽、雨や風があつて花が咲くという歌だ。命は一人では花咲けないと。子どもたちの描いた花の絵の映像が、劇場の壁と天井一面に広がった最後に、その心が感動的に伝わった。むすび座の総合的な創造力を示す舞台だった。

(八月二十四〜二十六日、名古屋市緑文化小劇場)